

令和4年12月15日

横歴 木村高久

縄文人の心を探る

I はじめに

1 日本文化の基層を築いたと言われる縄文人の暮らしや文化などについては少しづつ明らかになってきている。しかし、「縄文人の心」については必ずしも明確ではない。そこで今回解説を試みるものである。

(1) 縄文時代はいつからか。(ア～ウ 山田康弘氏説)

ア 旧石器時代と縄文時代の区分を土器の出現とする。(1万6500年前・青森県大平山元I遺跡)

イ 土器の一般普及を区分とする。(1万5000年前)

ウ 縄文文化的な生業、居住形態が確立した段階とする。(1万1500年前)

エ 土器の出現でなく、温暖化が始まり、落葉広葉樹林が広がっていた九州南部で隆線文土器が出現したとき。(約1万5000年前～1万4500年前)(藤尾慎一郎氏説)

◎ ここでは、通説である①とする。

(2) 縄文時代はいつ終わったか。即ち、弥生時代はいつからか。

ア 2003年(平成15)5月、国立歴史民俗博物館チームにより弥生早期の土器に付着していた炭水化物等の炭素14年代測定の結果、九州北部の水田稲作が前10世紀であることが判明

イ 水田稲作がある程度広がって定着・普及した時(板付I式土器の成立)を弥生時代とする。

(岡崎敬氏説) ◎ ここでは、多数説の①とする。

2 縄文時代略年表(「縄文人の祈りと願い」記載の表を一部修正)

番号	区分	主要事項
1	草創期 (約1万5000年前)	*土器の制作・使用 *最古の土偶 *竪穴住居の増加 *弓矢の使用 *氷河期が終わり温暖化する。
2	早期 (約1万1000年前)	*温暖化で海平面が上昇 *貝塚が形成され始める。 *犬を人間とともに埋葬 *シャーマンが出現
3	前期 (約7000年前)	*温暖化・海進がピーク(縄文海進) *漁労が発達し、貝塚 が多くなる。 *環状集落がつくられる。
4	中期 (約5500年前)	*土偶に顔の表情や女性的な造形が強まる。 *大型の土器や土偶が出現 *集落の規模が大きくなる。
5	後期 (約4400年前)	*多彩な漆製品や土偶・墓の副葬品増える。 *気候の寒冷化 *北海道、東北北部に環状列石がつくられる。 *抜歯の風習
6	晩期 (約3200年前)	*土偶の姿形の表現が多様化 *抜歯のほかに叉状研歯(さじょうけんし)の風習 *後半から寒冷化

II 縄文人の心とは

「縄文人の心を探る」とはいっても縄文人の子孫が現存してはいないし、文献があるわけでもない。よって、考古学(遺跡、遺物等)や民俗学などから推理することとなる。具体的には「集落の形態、墓地、土器・土偶」を手掛かりに解明することとする。

1 集落の形態

集落の形態は時期・地域により異なるものである。自然環境、社会環境の変動によるものであろう。

(1) 西田遺跡(岩手県紫波町・中期)

中央広場の周りに200基ほどの墓穴群がありその外側に掘立柱住居群、その外側に多くの竪穴住居があり、さらに外側に貯蔵庫が円状にある環状集落である(注1)。当時、中央広場では住民同士が語り合ったであろう。そのことで集落みんなの共通意識が形成されたと考えられる。

なお、各集落は資源確保の観点から海辺では2km程度、内陸では4km程度間隔を取っていた。

(注1) 縄文時代早期末から前期初頭に成立。中期～後期にかけて栄えた集落の形態の一つ。広場を中心に墓域と住居域が同心円状(環状)になる構造を特徴とする。

(2) 御所野遺跡(ごしょのいせき)(岩手県一戸町・中期後半)

配石遺構(注2)と盛土遺構(注3)にある墓を囲んだ中央むらと、その東西に東むら、西むらの居住域をもつ集落である。集落中央広場の立石から茂谷山(もやのやま)が見える。縄文人は山をいただき周囲の自然と一緒に生き、やがて死して山に帰ることを思っていたのではないだろうか(アニズム)(注4)。

(注2) 運搬可能な大きさの石を一定の形状に配置した遺構のことをいう。

(注3) 積み上げた土のことで、縄文遺跡からはドーナツ形やコの字などの形のものが発見される。盛土からは土器、石器、土偶などが出土する。

(注4) あらゆる自然物や自然現象に靈力を認め、精霊(注5)が宿るという信仰体系の一形態をいう。

(注5) 草木、動物、人、無生物、人工物など一つ一つに宿っているとされる超自然的な存在のこと。

(3) 観音寺本馬遺跡(奈良県橿原市・晩期)

住居と墓が混在していて植物と木の実を加工する加工場もある。住居から少し離れたところにクリ林があった。環状集落は東日本の一定の時期に出現したものであった。一方西日本では観音寺本馬遺跡の姿が一般的な光景であった。

◎縄文時代の集落は、中央広場・墓・住居が三つでセットとなっている。ただ配置が時期・地域により異なる。いずれにしても大自然と死亡した先祖が見守る中、作業をしたり、語ったり、歌ったり、踊ったりしたであろう。(民族誌を参考として)

2 墓の様相と出土した人骨の形態

(1) 縄文時代の墓

縄文時代の多くの墓は土壙(坑)墓(どこうぼ)といい、地面に穴を掘って遺体を埋め、土を被せたものである。また、遺体の手足を強く折り曲げる「屈葬」(注6)が一般的であるが、手足を伸ばした「伸展葬」もなかにはある。

(注6) 生者に災いが生じないよう死者の靈を封じ込める思いがあったと言われる。

(2) 埋葬の実例

貝塚には所定の場所に貝殻、食物のたべかす、壊れた道具、人骨、残土などが捨てられている。しかし単なる「ゴミ捨て場」ではなく、カミに返す神聖な「送り場」でもあった。

ア **宮野貝塚** (岩手県大船渡市・縄文前期～晩期～中世～近世)

当貝塚から出土したのは30代後半位の女性の人骨(骨盤なし)で、立派な首飾りをしていた。周辺の遺物などから縄文中期に亡くなっていると判断できる。

余談であるが人骨から男女を判別するには5つの指標があるという。そのうち素人でも分かるのが骨盤の左右の恥骨が接合する部分の角度だそうだ。相対的に大きければ女性、小さければ男性という。

さて、この女性はイノシシの歯牙製(しがせい)の首飾りおよび獸骨製玉を合計10点以上着装していた。なお、首に骨病変(「骨肉腫」の可能性)があった。また、さらに「外耳道骨腫」(潜水を職業とする人に多くみられる。)や眼窩(がんか)の上壁に軽度だが細かい穴が多くあいている「クリブラーオルビタリア」(注7)もある。

(注7) 栄養状態が悪い時、特に鉄分の不足によって引き起こされる骨病変のこと。

縄文時代の単独・单葬令のうち、装身具をつけているのは全体の約9%であり、うち女性の割合は約3・2%である。しかもイノシシの歯牙の首飾りはこの女性以外いないのである。極めてまれなケースなのだ。

よって、本女性の首飾りは病気に対する呪術的医療行為と思われる。同様の例は宮城県田柄貝塚(後期)、岡山県津雲貝塚(晩期)などでも存在する。現在の我々からすれば迷信だと断ずるが、当時の人にとっては救われたのではないだろうか。

イ **中妻貝塚** (茨城県取手市・縄文後期)

中妻貝塚からおよそ100体の人骨(頭蓋だけで96体)が出土した。多数合葬・複葬の例はあるが、通常多くても10体ぐらいであり、100体位の人骨は桁外れである。

調査の結果、頭、腕、脚などの部位が完全に離れている人骨もあれば、まだ部位がつながっている人骨もあった。これらから伝染病などで一時に大勢の人が死んだのではなく、死亡時期が異なる人を一か所に集約して埋葬(再埋葬・再葬墓)であった。何故、再埋葬が行われたのか。それは次のように理解できる。

関東地方の中後期後半～後期初頭の集落は継続せず、この時期だけで廃絶する事例が多い。一方、この時期に新しく集落がつくられ後期へと継続する集落もある。この際、異なる家族集団が集合し共同生活を開始するときに生じるストレスを解消するための葬送儀礼であると言われている。従来の家族単位の血縁を重視した集団から、擬制的血縁関係と地縁関係により構成された集団となるのである。そして祖先と同じと考える「祖靈崇拜」が登場することとなる。

ウ **前浜貝塚** (宮城県気仙沼市・縄文晩期)

前浜貝塚の楕円形の土壙から15歳～17歳位の女性の人骨が見つかった。この人骨は四肢を折

り、仰向けの姿勢(仰臥屈葬)で埋葬されていた。しかも、顔面に一匹のイヌが乗せられていたのである。更に抜歯(注8)がされていた。それだけでなく女性が埋葬されていた土壌に接して土器が埋められていたのだ。

(注8)抜歯とは縄文時代の風習として健康な前歯を意図的に抜き取ることである。全国の人骨出土データからみると13歳位に犬歯が抜かれることが多い。これは「成人通過儀礼」だと考えられている。この他、結婚時に行う「婚姻抜歯」、配偶者や親類が死亡した時に^{行う}「服喪抜歯」があったという。なお、抜歯はやり方が悪いと非常に危険で大量出血で生命の危険を伴うことがある。

そこで、前浜貝塚の女性には上顎(じょうがく)の左右の犬歯と下顎の左第一切歯に抜歯があつたことから、成人し結婚していたといえる。なお、抜歯の後の歯槽部分が完治していなかつたことから結婚後まもなく亡くなつたと判断できるのである。

次に、土器について説明するが、この土器には受精後38週～39週位の赤ちゃんの骨が入っていた。この様に縄文時代には生後1年以内の赤ちゃんの遺体を土器に入れて埋葬する「土器棺墓(甕棺墓・埋甕)」という風習があつた。その意図は土器を母体に見立てて、赤ちゃんをもう一度母体に戻し「再生」を願うことからであろうと言われている。

最後にこの女性の顔面にイヌが乗せられたのは何故であろうか。この女性が妊娠中か出産時の事故で亡くなつた可能性が大であり特殊な埋葬が行われたと言える。北海道虻田郡高砂貝塚や岡山県岡山市の彦崎貝塚でも同様な例がある。文化庁編集の「日本民俗地図」によれば日本各地において妊娠中または出産直後に死亡した女性を特別な方法で埋葬する例が存在する。また、東南アジアでもこの様な事例は多い。インドネシアでは、妊産婦が死靈としてさまよい歩くのを防ぐためであるといわれている。

エ 大人と子供の合葬 (がっそう)

縄文時代の大人と子供の合葬例は約30例ある。例えば福岡県遠賀郡山鹿貝塚(草創期～晚期)や千葉県船橋市古作貝塚(後期)などの事例では大人の女性が乳幼児の子供を腕に抱いた状態で埋葬されていた。また、千葉県千葉市加曾利貝塚(中期～後期)では大人の女性が幼児期の子供を背負った状態で埋葬されていた。さらに、千葉県市原市草刈貝塚(中期)や長野県安曇野市北村遺跡では大人の男性と小児期の子供が顔を見合わせた形で合葬されていた。子供が乳幼児だと大人の女性と、小児期となると大人の男性と合葬されるようになる。一般的には大人と子供は親子と考えられる。ところが、國學院大學名誉教授の小林達夫氏はアメリカ先住民の民族誌を参考に、大人と子供の合葬は身分の高貴な子供と奴隸との合葬かもしれないと述べている。

私見しかし、私はこの見解には同意できない。縄文時代に奴隸制はなかったと考える。その根拠であるが、狩猟・採集・漁労の生活である縄文人に大きな経済格差は生じていないこと、戦争がなかったこと(注9)、身分差があったとはいえ弥生時代ほどではなかったこと、山内丸山遺跡を除いて集落の規模は小さかつたことからである。

(注9)個人的な 傷害事件は僅かにあるようだが、考古学的にも戦争の痕跡(複数の殺傷された人骨、戦闘用武器など)はない。では何故戦争がなかったのか。一般的には縄文人が穏やかであったからと言われるが、私は日常の生活をするうえで戦争の必要がなかったから述べたい。縄文人はそれ

ぞれのテリトリー(領域)で十分足りていたので、他の集落を襲って土地や財物を収奪する要性が生じなかつたのである。

なお親子か否かについては、今日ではDNAによる分析が出来れば明確な判断ができる。早く調査して頂きたいが、人骨の出土状況によってはDNA分析が難しい場合もあることも事実である。

オ **入江貝塚**(北海道洞爺湖町・後期)

この貝塚から幼少時に小児麻痺(ポリオ)に罹患し立って歩けなかつた女性が、家族や集落の方の支援を受けて20歳位まで生活でき、死後も丁重に埋葬されたのが発見されている。同様の例として栃木県・前期の大谷寺(おおやじ)洞穴遺跡、岩手県・晚期の中沢浜貝塚からも見つかっている。当時、皆で助け合う精神があつたと言える。

3 土器・土偶

縄文時代の道具には様々なものがあるが、小林達夫氏は実用的な道具を「第一の道具」と言い、機能用途が不明な道具を「第二の道具」と命名した。第一の道具は土器、石皿、釣り針、砥石、石鏃、石槍などである。また、第二の道具としては土偶、石棒、石剣、石冠、各種土製品などをいう。これらは儀礼、呪術に使用されるものである。**私見** 小林氏の2分割は不十分であり「第三の道具」を設けるべきであると提起するものである。第三の道具とは第一の道具の機能と第二の道具の機能を併せ持つものである。即ち実用的な面と呪術的面を併せ持つもので、事例としては土器や装身具(アクセサリー)などが考えられる。

(1) 土 器

ア 縄文土器には時期と地域から縄文土器編年表がつくられている。また、文様や堆積順などから型式が定められた。

縄文土器の時期別の特徴

区分	特 徴
草創期	深鉢で単純な形が多い。底部は尖底(せんてい)か丸底と推定される。
早 期	波状口縁や隆帯文等を付けた形や文様に変わる兆しが出てきた。
前 期	底部が平底になり、新たに浅鉢類が出現する。口縁部に技巧を凝らした装飾がされる。
中 期	地域ごとに特色のある形や文様が施される。
後 期	東日本の土器は、趣向を凝らした文様や器種の多様化が進む。一方西日本の土器は、文様はつけず器面を磨くことに重きを置く。また、実用性を重んじる。
晩 期	東日本の亀ヶ岡系土器、西日本の磨研土器系のようなスキルが高い土器ができる。

イ 縄文土器とは

縄文土器(写真1・P9)と弥生土器(写真2・P9)を比較すると一目瞭然にその違いを理解できる。

弥生土器は装飾がないわけではないが簡素である。そして容器としての使用目的に利便なように制作されている。一方縄文土器は波状口縁や隆帯文があり華やかであり美術品か祭祀用の特別眺えな

ら理解できる。しかし、土器についた煤や煮たあとの汁などの痕跡があり実用品であったことは事実である。ところで、実用の容器としては重たくなるし、邪魔な部分があり利用勝手が悪い。しかるに縄文人はこの不便な様式を意図的に選択したのである。そこには縄文人の何らかの思いが託されているのは事実だ。ただ現代人にはそれが何かは解読できないところである。千葉大学非常勤講師の井口直司氏は、「縄文土器に表現された造形は、自然界の精霊や動植物との共存がキーワードではないか」と述べている。**私見**それから考察すると煮炊きする食料が沢山確保できるようにとか、それらを送る意味があったのではないだろうか。

ウ 動物文様

縄文土器の特徴の一つに動物文様(写真3・P9)がある。これは特別な文様で4つに分類できる。ア 哺乳動物を思わせるもの、イ 爬虫類を思わせるもの、ウ 未特定の生き物を思わせるもの、エ 人間を思わせるものである。

最初の出現は縄文時代前期末から中期初頭であるが、関東・甲信地域に限定される。動物文様としてはイノシシである。写実性が高いし特徴をよく把握している。しかし、これは長続きせずやがて消えていく。

次に第二段階として中期中頃になると勝坂式土器(神奈川県相模原市)のみに登場する。文様が哺乳動物ではなく蛇などの爬虫類やカエルなどの両生類であり、しかも抽象的な表現である。これらの意図は不明であるが、何等かの願い、訴えを表しているものである。

特に顔面把手(はしゅ)(人面把手)は1遺跡1個位しか出土しない貴重品である。土器に付けられた顔面の文様は類似している。**津金御所前遺跡**(山梨県北杜市・縄文中期)から出土した土器(写真4・P9)は、土器全体を女性と見立て出産を表現したものと言われている。これは、そのものずばりで安産を祈念したものであると考える。

エ 人体文(シャーマン)出現

三内丸山遺跡(青森市・前期中頃～中期末葉)から出土した土器の破片に、異様な絵画(写真5・P10)があった。人物のようであり右手に弓を、左手に矢を持ってあたかも踊っているようなしぐさである。これはロシアのチュクチ半島に居住するチュクチ族のシャーマンが踊る姿(写真6・P10)に類似している。また**八天(はってん)遺跡**(青森県北上市・後期)や**小田遺跡**(青森県花巻市・晩期)からも同様な土器が出ている。やはり縄文時代にはシャーマン(注9)がいたといえる。

また、**垣ノ島 B 遺跡**(函館市・早期前半)の墓穴から赤漆塗りの繊維製品が出土された。これはシャーマンの墓と考えられている。同じく**伊茶仁チシネ第一竪穴郡遺跡**(北海道標津町・前期初め)の土壙墓から赤漆塗りの繊維製の耳飾りと首飾りが発見されている。これもシャーマンと思われる。

(注9) 心理的なトラスト状態(精神状態が平時とかけ離れた境地にあるさま)を自ら作り、精霊などと直接交渉し予言・治病などを行う呪術者のこと。

(2) 土偶

ア 基礎的事項

① 縄文時代に粘土で制作したもののうち、「人間に類似している」と思われるものを**土偶**、器を**土器**という。その他のものは**土製品**と称する。なお土偶は人形ではない。また、土偶も土器も粘土で

型をつくり素焼きにして出来上がりである。

- ② 繩文土偶は沖縄を除き全国の遺跡から発見されている。また見つかった土偶は造られた時期や地域がまちましであるし、形も大きさも様々である。なお、出土数は約2万点である。
- ③ 早期は北海道から九州まで土偶が出土する。前期には東日本に集中し西日本からは出土がなくなる。中期では関東・甲信を中心に出土するが、中期の終わり頃になると数が減ずる。後期では再度東日本を中心に増加する。晩期は中心が東北へ移行する。
- ④ 日本で最古の土偶(写真7・P10)は滋賀県東近江市・草創期の相谷熊原(あいだにくまはら)遺跡から発見された。胸と胴から出来ている高さ3・1cmのもので、顔も手も足もない。また、茨城県利根町・早期の花輪台貝塚から出た土偶も相谷熊原遺跡のものとよく類似している。
- ⑤ 土偶の規模による使用方法説
林健作氏は土偶の大きさにより役割が異なると言われた。即ち大型(45~20cm)は、遮光器土偶(岩手県盛岡市手代森遺跡・高さ31cm)・繩文のビーナス(長野県茅野市棚畠遺跡・27cm)である。中型(12cm~8cm)は、板状土偶、屈折土偶(青森県三戸郡野面平遺跡・高さ8・2cm)である。最後に小型(6cm前後)はX字形土偶や三角型土偶である。大型は集落総出の祭祀用で、中型は家族や個人の祭祀に使用。小型は個人の祈り用と考える。私見この説明は分かりやすいが問題がある。土偶の出土数を考えると大型は極めて少數であり、次に中型が少ない。よって大きさによる役割の意味がないのではないか。

イ 土偶とは何か

土偶とは何かについては昔から各説がある。以下、述べるものである。

- (1)神像説 繩文時代の神様である。
- (2)女神像 土偶の多くに胸があり、お腹が膨れているものもあり、妊娠線もある。よってこれは女神であり妊娠、安産の守り神である。加えて子孫繁栄や豊穣を祈念した。農耕の地母神(注10)でもあった。(注10) 豊穣・多産をもたらす母なる神で、大地の豊かなる体現である。
- (3)故意破損説 今まで出土している土偶の九割九分が破損していることから呪術の為に意図的に破損したとの説である。後に自分や家族が病になったり、怪我をしたときに土偶のその部分を壊して快癒を願った。
- (4)土偶祭式論 水野正好氏が提唱した説。「土偶は女神である。女神(土偶)を製作することは誕生を意味する。次にその女神を破壊するのは死を象徴している。さらにバラバラに撒かれているが、そこから再生することを願っているからである。これは縄文人の世界観である「輪廻転生」を表している」という。
- (5)依代(よりしろ)説 谷川磐雄氏、甲野勇氏が唱える説。「土偶は精霊類が降り立ってくるための人形(ひとがた)であるから依代である。」
- (6)岡村道雄氏説 「シャーマンの形をカミ・精霊のイメージを含めて女神像として作り、それに受胎・安産・この成長、厄払い・家内安全等の集落全体や家族・女性の願いをこめて祈ったものが土偶で、そして使用に耐えなくなった土偶を、周辺集落の人々が拠点集落に持ち寄って「送り」や祭祀を行った。」と述べている。

(7) 山田康弘氏説 「土偶は新しい生命を生み出す妊産婦の姿を写しとったものである。そしてそれによって解決できると思われることすべてに対して、呪術的に用いられたと思われる。」

(8) 小林達夫氏説 「土偶は縄文人の神様ではないし、縄文人を写したのでもない。縄文人自身も土偶の人相、体格を正確には知らなかったのである。見ることのできない精霊のイメージであった。従つて顔の表現は出来なかったのだ。当初の土偶の高さが低かったことから、祭壇などに安置するものでなく掌の中で願いをかけたものと考える。土偶を胸があるから女性と決めつけてはいけない。男性にもあるのだ。胸の表示は単に土偶の正面と背中との区別を示すものからはじまったのだ。よって、土偶は女性でも男性でもなく性を超越した存在、すなわち精霊の仮の姿である。」

私見 小林氏の「土偶は女性でも男性でもなく性を超越した存在」は賛成できない。土偶の形は下腹部が膨らんでいたり妊娠線があったりして女性をイメージしている。また、胸が土偶の正面と背中を区別する単なる印というが、最古の土偶の胸を見れば違っているのは明白である。さらに男性の土偶も出土するし、中には男女一対で発見された土偶もあることが根拠である。

◎ 以上の様に土偶とは何か、役割は何かについて諸説あるが、現在のところ決定的な説は未だないところである。

ここで、新たな観点からの土偶論を紹介したい。それは人類学者の竹倉史人氏の説である。氏は「土偶は縄文人の姿をかたどっているのでも、妊娠女性でも地母神でもない。縄文人の食用植物たちが土偶のモチーフ(写真8・P10)である。それらの植物に手と足が付いたのである。」と述べている。そして、土偶の頭、顔の形に着目し、それぞれ堅果類・貝殻・稻穂に充てはめている。また、土偶の目的は「植物資源の利用(採集・半栽培・栽培)に伴う呪術的儀礼において使用されることを目的に制作された。」とも言っている。とてもユニークな見解である。

私見 しかし、これは違うと考える。最古の土偶を始めいくつかの土偶は顔も手も足もない。また、多くの土偶には繰り返しになるが胸があるし、下腹部が膨れて妊娠線があるものもある。これは女性の精霊のイメージであり堅果類や貝殻ではない。また縄文人が不安に思ったことや願ったことは食用植物や貝が良く取れることより妊娠、安産、病気予防や治癒そして狩猟・採取・漁獵の豊漁、豊穣であると考える。

私の土偶論

当初は、山田氏の冒頭の土偶説である「新しい生命を生み出す妊産婦の姿を写しとったものである。」と同じである。そして多産、安産、子孫繁栄を願った。その後は時期・地域により縄文人の悩み事・願い事の変化に応じ、病気治癒、再生、食物の豊かな実りなどの目的が追加するか、変化したのである。この様な例としては京都の伏見稻荷神社を總本社とする稻荷神社であるが、初めは五穀をつかさどる倉稻魂(うかのみたま)を祀り「五穀豊穣」を願った。やがて商業が振興すると「商売繁盛」へと変わったものがある。

III まとめ

縄文人は道具として石器、土器、木や動物の骨製品などしかない。また科学知識も医療もない。よって、常に病気、災害や食糧不足に怯えた生活であったろうと想像されるかもしれない。

しかし、縄文人は、集落の形態で検証したように中央広場・墓・住居の3点セットで家族・集落の人々や墓地に眠る先祖とコミュニケーションをとり充実した日々を過ごした。そして、あらゆる自然物や自然現象に靈力を認め精霊が宿ると信じていたのである。また、墓地では誕生から死そして再生を肌身で感じていたので死の恐怖はなかったと考える。さらに土器・土偶では時期・地域により異なるが、それらを通して各種の願い事をしていた。以上からストレスは少なかったであろう。また、戦争もなかったし、病気などで困った人があれば皆で助け合っていた。寒冷化の時期を除いて四季のさまざまな食材を楽しんでもいた。しかも狩猟・採取・漁労ではあらゆるものに精霊が宿るので必要以上は採取・捕獲しなかったのである。彼らはあの時代の環境下で精一杯生き、幸せに暮らしていたといえる。



写真1 神奈川県勝坂式土器(中期)
「縄文土器ガイドブック」から転写



写真2 弥生土器のセット
「横歴博物館展示案内書」から転写



写真3 長野県曾利遺跡出土の土器
「縄文土器・土偶」から転写



写真4 津金御所前遺跡出土の出産文土器
「日本人の起源 縄文・弥生の世界」から転写



写真5 青森県三内丸山遺跡出土の土器片
「縄文人からの伝言」から転写



写真6 チュクチ族のシャーマン
「縄文人からの伝言」から転写



写真7 日本最古の土偶
「日本人の起源 縄文・弥生の世界」から転写

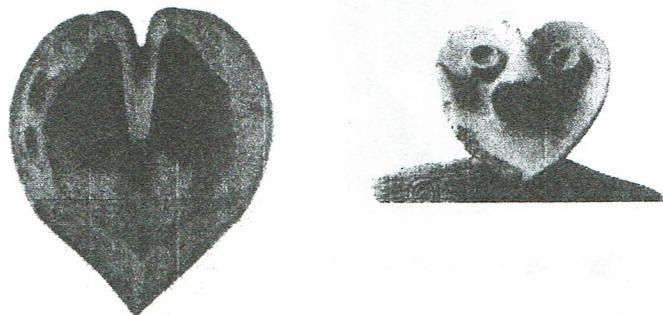


写真8 ハート形土偶とオニグルミ
「土偶を読む」から転写

(参考資料)

- 1 「縄文人からの伝言」岡村道雄著 集英社新書 2014・07・22発行
- 2 「縄文の思想」瀬川拓郎著 講談社 2017・11・20
- 3 「縄文人の祈りと願い」瀬口眞司、他3名著 ナカニシヤ出版 2013・02・26発行
- 4 「縄文人の死生観」山田康弘著 角川ソフィア文庫 2018・06・25発行
- 5 「縄文 土器・土偶」井口直司著 角川ソフィア文庫 2018・06・25発行
- 6 「日本人の起源 縄文・弥生の世界」本多秀臣編集長 洋泉社 MOOK 2018・07・05発行
- 7 「土偶を読む」竹倉史人著 晶文社 2021・05・30発行
- 8 「縄文土器ガイドブック」井口直司著 新泉社 2012・12・15発行
- 9 「縄文の思考」小林達雄著 ちくま新書 2008・04・10発行
- 10 「縄文人に学ぶ」上田 篤著 新潮新書 2013・06・20発行
- 11 「縄文人の世界」小林達雄著 朝日選書 1996・07・25発行
- 12 「縄文謎の扉を開く」松久保秀胤監修 富山房インターナショナル 2009・12・16発行